



信仰における一致

暗唱 聖句

「ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです」
(使徒言行録4:12、新共同訳)

「この人による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」
(使徒行伝4:12、口語訳)

今週の 聖句

使徒言行録4:8～12、使徒言行録1:11、マタイ25:1～13、
ヘブライ9:11,12、出エジプト記20:8～11、Iコリント15:51～54

安息日
午後
11/17

今週のテーマ

1888年、セブンスデー・アドベンチストは、いくつかの鍵となる聖句の解釈を巡って、一時期、激しい論争をしました。牧師や教会の指導者たちは、ダニエル7章の預言の「十本の角」の正体やガラテヤ3:24の「律法」の正体を議論していましたが、その間に、お互いに対する敵対的な態度が彼らの交わりと友情を破壊し、教会の一致と使命を損なったことに気づいた人はほとんどいませんでした。

エレン・G・ホワイトはその状況を深く嘆き、この議論に関わるすべての人に、自分とイエスの関係についてよく考えるように、またイエスに対する愛が、とりわけ意見が一致しないときに、いかに私たちの行為によって示されるべきであるかということについてよく考えるように、と勧めました。彼女はまた、聖書の解釈においてすべての聖句のあらゆる点に関して、教会内の全員が同意することを期待すべきではない、とも言いました。

しかし、彼女はまた、アドベンチストの根本的な信仰に関しては、理解の一致を追求すべきだ、とも強調したのです（『著者と編集者への勧告』28～32ページ、英文参照）。私たちは今週、私たちをアドベンチストとし、信仰による私たちの一致を形作る聖書の根本的な教えのいくつかに目を向けます。

私たちセブンスデー・アドベンチストは、ほかのキリスト教諸教派と多くの共通点を持っていますが、私たちの一連の教理は、キリスト教会においてほかのどの宗派も宣べ伝えていない独自の聖書の真理の体系を形作っています。それらの真理は、私たちを終わりの時代の残りの民として定義するのに役立ちます。

問1 使徒言行録4：8～12、10：43を読んでください。ペトロは救済計画を理解するうえで、いかにイエス・キリストを重視していますか。

使徒パウロはコリントの信徒に、良き知らせとは、神が「キリストによって世を御自分と和解させ……られた」（Ⅱコリ5：19）ことである、と言いました。キリストの死は、私たちと父なる神との和解の手段であり、罪と死によってできた隔たりを埋めたのです。クリスチャンは何世紀にもわたって、イエスの死、復活、そして彼が成し遂げるために来られた和解の意味について考えてきました。この和解の過程は、英語で「贖い」（atonement）と呼ばれています。もともとは「一つになること」（at-one-ment）を意味した古英語です。これは、「一つに」なっている状態、「一致」している状態のことです。従って、贖いは、関係の中における調和を意味し、仲たがいが続いてきた場合、そのような調和は和解の結果なのです。このように、教会の一致は和解の賜物です。

問2 次の聖句は、イエスの死と復活の意味について、何を教えていますか。
ローマ3：24、25、Ⅰヨハネ2：2、Ⅰヨハネ4：9、10、Ⅰペトロ2：21～24

私たちはイエスの死と復活に関する信仰を、ほかの多くのキリスト教諸教派と共有していますが、それを、黙示録14：6～12の三天使の使命の一部である「永遠の福音」（黙14：6）とのつながりで宣べ伝えます。私たちセブンスデー・アドベンチストは、ほかのキリスト教諸教派が強調していないこれらの聖句を重視しているのです。

◆ キリストの死と復活という現実と、その現実がもたらす希望を、私たちはどうしたらいつも念頭に置くことができるでしょうか。

使徒や初期のクリスチャンたちは、キリストの帰還を「祝福に満ちた希望」（テト2:13）と考え、聖書のあらゆる預言や約束が再臨において成就することを期待しました。セブンスデー・アドベンチストは、この確信を今もしっかり持ち続けています。実際、私たちの「アドベンチスト」という名前は、そのことを明快に述べています。キリストを愛するすべての人は、期待しつつ、キリストと直接交わることのできる日を楽しみに待っているのです。その日まで、キリストの再臨の約束は、神の民としての私たちを一致させる影響を及ぼし続けます。

問3 次の聖句は、キリストの帰還について、何を教えていますか。使徒1:11、マタ24:26、27、黙1:7、1テサ4:13～18、黙19:11～16

聖書は、イエスが御自分の贖われた民を迎えるために再び来られると、繰り返し私たちに約束しています。この出来事がいつ起きるかは、推測すべきことではありません。なぜなら、「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも知らない。ただ、父だけがご存じである」（マタ24:36）と、イエス御自身が言われたからです。私たちは、キリストがいつ戻って来られるのかを知らないばかりか、私たちにはわからない、と言われているのです。

イエスは公生涯の終わりに「十人のおとめ」のたとえ話（マタ25:1～13）を語り、教会がイエスの再臨を待つ際に体験することを説明なさいました。二つのおとめのグループは、イエスを待っていると告白する二種類の信者をあらわしています。これら二つのグループは、表面的には似ているように見えます。しかし、イエスの到来が遅れるとき、彼らの本当の違いが明らかになるのです。一つのグループは、遅れにもかかわらず、希望を持ち続け、十分な霊的備えをしていました。イエスはこのたとえ話によって、クリスチャンの体験が感情的な興奮や熱狂に基づくのではなく、神の恵みに対する継続的な信頼と、神の約束の成就に対する明白な証拠がないときでさえ、信仰によって忍耐することに基づくのだ、と弟子たちに教えたいと願われたのでした。イエスは今日でも、「目を覚まして」、どんなときにも主の来臨の備えをするようにと、私たちを招いておられます。

◆ 「セブンスデー・アドベンチスト」という名前は、再臨がどれほど重要であるかを表明していますが、個人のレベルで、どうしたら、再臨の現実を念頭に置き続けることができるのでしょうか。年月が過ぎ去る中で、どうしたら、イエスが「十人のおとめ」のたとえの中で警告された過ちを犯さないようにできるでしょうか。

旧約聖書の中で神はモーセに、御自分の地上の住まいとなる（出 25：8）幕屋（つまり、聖所）を建てなさい、とお命じになりました。聖所は、そこでの奉仕を通してイスラエルの民が救済計画を教えられる場所でした。その後、ソロモン王の時代に、持ち運び可能だった幕屋は、壮麗な神殿に置き換えられました（王上 5～8 章）。この幕屋も神殿も、天の聖所、すなわち「人間ではなく主がお建てになった聖所また真の幕屋」（ヘブ 8：2、さらに出 25：9、40 も参照）を模倣したものでした。

聖書の至る所で、神の主要な住まいとしての役割を果たす天の聖所がある、と考えられています。地上の聖所での奉仕は、救済計画とイエスの天における祭司の働きの「小預言」だったのです。

問 4 ヘブライ 8：6、9：11、12、23～28 と I ヨハネ 1：9～2：2 を読んでください。これらの箇所は、天におけるイエスの祭司としての働きについて、どのようなことを教えていますか。

昇天以来、キリストが私たちの救いのために祭司として働いておられる場所が天の聖所です（ヘブ 7：25 参照）。それゆえ、「憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこう」（同 4：16）と、私たちは勧められています。

地上の天幕には、祭司の働きに二つの段階がありましたが（第一に、聖所における日々の奉仕、次に、至聖所における年 1 回の奉仕）、そのように、天におけるイエスの働きにも二つの段階があると、聖書は記しています。天の聖所におけるイエスの働きは、執り成し、赦し、和解、回復などを特徴とします。悔いている罪人は、仲保者なるイエスを通して、すぐに父なる神とつながることができます（I ヨハ 2：1）。1844 年以來、至聖所におけるイエスの働きは、年 1 回、贖罪日になされていた裁きと清め（レビ 16 章）の側面を扱っています。聖所を清める働きも、流されたイエスの血に基づくものです。この日になされた贖いは、罪を取り除き、神の下での調和の取れた一つの統治の中へと宇宙を完全に和解させるために、キリストの功績を最終的に用いることを予示していました。この二段階の働きの教理は、救済計画全体の理解に対するアドベンチスト独自の貢献です。

セブンスデー・アドベンチストが信じ、掲げているもう一つの重要な聖書の教えが安息日です。これは、私たちの間に一致と交わりをもたらす極めて重要な教理であり、キリスト教界において、ごくわずかな例外を除けば、私たちだけが守っているものです。

安息日は、創造週から続く、人類への神の賜物です（創2:1～3）。天地創造の際に、神の三つの際立った行動によって安息日は制定されました。それは①休息、②祝福、③聖別です。これら三つの行動が、安息日を神の特別な賜物として創設し、人類は、天の現実を体験し、神の6日間の天地創造を確認できます。有名なラビ、アブラハム・ヨシユア・ヘッセルは、安息日を「時間の中の宮殿」と呼びました。神が特別な方法で御自分の民と会われる聖なる日という意味です。

問5 次の聖句は、人類にとっての安息日の意味について、どのようなことを教えていますか。出20:8～11、申5:12～15、エゼ20:12、20

イエスの模範に従いたいという願いから（ルカ4:16）、アドベンチストは第七日安息日を守ります。イエスが安息日の礼拝に参加されたことは、彼がそれを休息と礼拝の日として是認なさったことを明らかにしています。彼の奇跡の中には、安息日になされたものがありました。それは安息日を祝うことでもたらされる（肉体的かつ霊的）いやしの側面を教えるためでした（ルカ13:10～17参照）。使徒や初期のクリスチャンたちは、イエスが安息日を廃止なさらなかったと理解していました。ですから、彼ら自身も安息日を守り、その日に礼拝に出席したのです（使徒13:14、42、44、16:13、17:2、18:4）。

安息日のすばらしい側面は、それが罪からの解放のしるしであることです。安息日は、神がイスラエルの人々をエジプトの奴隷から、約束されたカナンへの地での休息へと、救出された記念日です（申5:12～15）。度重なる不服従と偶像礼拝のために、イスラエルがこの休息に完全には入れなかったにもかかわらず、神はなお、「安息日の休みが神の民に残されている」（ヘブ4:9）と約束しておられます。この休息に入りたいと願う者はだれでも、イエスが提供してくださる救いを信じることによって入ることができます。安息日を守ることは、キリストにあるこの霊的休息と、（罪から救われ、永遠の命を得るために、）私たちが行いにではなく、キリストの功績に頼っていることを象徴しているのです（ヘブ4:10、マタ11:28～30参照）。

◆ キリストが御自分の民に望んでおられる一致と交わりを体験するうえで、安息日はどんな具体的な形で助けとなりましたか。

天地創造の際に、「主なる神は、土（アダマ）の塵（ちり）で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」（創2：7）。人間の創造に関するこの記事は、命が神に由来することを明らかにしています。不死は、この命に本来備わっている側面なのでしょうか。聖書は、神だけが不死の存在であられ（Iテモ6：16）、生まれたときに人間に不死は与えられていない、と述べています。神とは違い、人間は死ぬ運命にあります。聖書は私たちの命を、「わずかの間現れて、やがて消えて行く霧」（ヤコ4：14）にたとえており、死ぬ際に、私たちの命は、意識のない、眠っているような状態に入ります（コへ9：5、6、10、詩編146：4、115：17、ヨハ11：11～15参照）。

人は死ぬ運命のもとに生まれ、死を免れませんが、聖書は、イエス・キリストが不死の源であると言い、彼が、彼の救いを信じるすべての人に不死と永遠の命を約束しておられると語っています。「神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです」（ロマ6：23）。「キリストは死を滅ぼし、福音を通して不滅の命を現してくださいました」（IIテモ1：10）。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハ3：16）。それゆえ、死後の命（来世）という望みがあるのです。

問6 Iコリント15：51～54、Iテサロニケ4：13～18を読んでください。これらの箇所は、死後の命や、不死が人間に与えられるときについて、どのようなことを教えていますか。

使徒パウロは、神が人間に不死をお与えになるのは死の瞬間ではなく、終わりのラッパが鳴り響く復活の時であると、明快に述べています。信者は、イエスを救い主として受け入れる瞬間に永遠の命を約束されますが、不死は復活の時にのみ与えられるのです。新約聖書は、魂が死に際して直ちに天へ昇るといった考えをまったく知りません。このような教えは、異教に根差しており、古代ギリシアの哲学にさかのぼりますが、旧約聖書にも新約聖書にも見当たりません。

◆ 私たちの死の理解は、再臨の約束のありがたさを一層認めるうえで、いかに助けとなりますか。この信仰は、私たちセブンスデー・アドベンチストをいかに強く結びつけるでしょうか。

私たちセブンスデー・アドベンチストは、ほかのキリスト教諸教派と多くの重要な教理を共有しています。言うまでもなく、その中心的な教理は、イエスの贖いと代理の死を通じての信仰による救いです。私たちは、ほかのクリスチャンたちと同様、私たちの義が私たち自身の行いの中にはなく、キリストの義の中に見いだされると信じています。そのキリストの義は、信仰によって与えられるものであり、身に余る恵みの賜物です。よく知られているように、エレン・G・ホワイトはこう書いています——「当然キリストが受けられるべきとり扱いをわれわれが受けられるように、キリストはわれわれが当然受けるべきとり扱いを受けられた。われわれのものではなかったキリストの義によってわれわれが義とされるように、キリストはご自分のものではなかったわれわれの罪の宣告を受けられた。キリストのものであるいのちをわれわれが受けられるように、キリストはわれわれのものである死を受けられた」（『希望への光』678 ページ、『各時代の希望』上巻11 ページ）。

それと同時に、全体として見るなら、私たちの一連の「信仰の概要」と、それらの教理から生まれる習慣や生活スタイルが、キリスト教界の中で私たちを独自の存在にしています。また、そうあるべきです。もしそうでないなら、私たちはなぜ——少なくともセブンスデー・アドベンチストとして——存在するのでしょうか。イエスに対する私たちの愛と、私たちが宣べ伝える教えとは、私たちを結びつける最も強力な要素であるべきです。

話し合いのための質問

- ① 「セブンスデー・アドベンチスト」という私たちの名前は、二つの重要な教え、つまり第七日安息日と再臨を指し示しています。名前の前半は創造を指し、後半は贖いを指しているのです。これら二つの教えは、いかに関連していますか。二つの教えは一緒になって、私たちが一つの民として何者であるかということの本質を、いかに簡潔にとらえていますか。

まとめ

セブンスデー・アドベンチストは、共通する多くの基本的教理（信仰の概要）を持っています。ほかのクリスチャンたちと共有するものもあれば、そうでないものもあります。全体として見るなら、これらの教えが、独特な教会としての私たちの独自性を形作るとともに、キリストにおける私たちの一致の基礎になっているのです。